

2006 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：135 カ国

応募総数：4,029 作品（子どもの部 1,688 作品、若者の部 2,341 作品）

文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『グローバル化社会の多様性と仲良くする』
アダム・モスコ（カナダ）14 歳

<若者の部>

- 『様々な肌の色の人が集まる差別のない多文化カフェでコーヒーはいかが？』
グロス・ルシアーナ（ルーマニア）18 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『共に生きることを学ぶ：グローバル化社会における寛容と多様性の促進』
ファティマ・ジェジェロラ・サンニ
（ナイジェリア）14 歳
- 『やさしさと勇気』
徐 由（韓民＜東京都在住＞）11 歳

<若者の部>

- 『心の中に平和のとりでを』
備前 陽子（大阪府）24 歳
- 『共生を学ぶ』
ムスタファ・オモトラニ・マリウム
（ナイジェリア）23 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- ナデズダ・ネウシピナ（ロシア）11 歳
- 鈴木 恵梨奈（日本＜中国在住＞）12 歳
- レベッカ・N・ドロビンスキ（米国）11 歳
- バビングトン・オモトラ（ナイジェリア）13 歳
- クララ（ジュンヒュン）・キム
（韓国＜ニュージーランド在住＞）14 歳

<若者の部>

- アントン・グラモビッチ（ベラルーシ）17 歳
- リナ・アル・エジェイラト（ヨルダン）23 歳
- アンドリアマエファ・ニリソア・マララティアナ
（マダガスカル）21 歳
- ジャクリーン・デッカーズ（オランダ）17 歳
- アリス・ウェルム
（ドイツ＜オランダ在住＞）21 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- 村上 ブテン 笑里（日本＜カナダ在住＞）8 歳
- マラー・メーディ・アルアブドゥワニ
（オマーン）9 歳
- 佐藤 理子（東京都）11 歳
- ウェイル・シェン（中国＜米国在住＞）12 歳
- 半下石 侑（東京都）12 歳

<若者の部>

- サウラブ・シン（インド）15 歳
- ブシュラ・グル・シディーキ（パキスタン）15 歳
- モニカ・ソボカン（スロベニア）15 歳
- 鈴木 香代子（東京都）17 歳
- ハニファ・アスラ・シルミ（インドネシア）17 歳
- スベトラナ・ペルコバ（ロシア）17 歳

- 山口 園美（岩手県）12 歳
- 吉田 沙央莉（兵庫県）12 歳
- ラチタ・シャシャニ・ビタラナ
（スリランカ）12 歳
- アマンド・ディケンズ（米国）13 歳
- オジオコ・チディオゴ（ナイジェリア）13 歳
- 中クウレテ・エマニュエル・チノンソ
（ナイジェリア）13 歳
- チブクラ・ディーピカ（インド）13 歳
- ハリカ・ラヤラ（インド＜米国在住＞）13 歳
- ラナ・チェビブ（カナダ）13 歳
- リサ・リアン（中国＜米国在住＞）13 歳
- アフラー・サリーム（インド）14 歳
- アムナ・ジャベッド（パキスタン）14 歳
- オニエネケ・スティーブ・チマ
（ナイジェリア）14 歳
- クリスティーナ・ダクルス（モーリシャス）14 歳
- ジルフィミヤン・タテブ（アルメニア）14 歳
- ドゥオリン・スー（カナダ＜米国在住＞）14 歳
- ハズラ・バゼール（英国）14 歳
- 廣瀬 眞波（大阪府）
- ペマ・ドルジー（チベット＜インド在住＞）14 歳
- R・A・ティリニ・プラサンギカ・ランデニ
（スリランカ）14 歳
- チメイ・ポサベック（米国）17 歳
- 天沼 智彦（東京都）18 歳
- アレクセイ・A・コレネフ（ロシア）18 歳
- ポティーラム・ヤシュビンド・クマール
（モーリシャス）18 歳
- ポン・シー・ミン（シンガポール）18 歳
- ガラン・サブシャン（トルコ）19 歳
- グレゴリー・オティエノ（ケニア）19 歳
- ジャクリーン・フルタド（オーストラリア）20 歳
- グー・ピン・クワン（シンガポール）21 歳
- チョー・ジェー・チー（マレーシア）21 歳
- ブライアン・R・ディクソン（カナダ）21 歳
- ロビン・ラマ・チャンドラ・シャルマ・カッシー
ア（モーリシャス）21 歳
- キャメロン・カーステン（米国）22 歳
- ヤント・ジャコップ（インドネシア）22 歳
- イレネ・N・マンチェラ（フィリピン）23 歳
- クリスタ・アナ・ニューバックー
（スイス&オーストリア）23 歳
- ファティマ・モウラッド
（オーストラリア&レバノン）23 歳
- オラニイ・ソロモン・アデバヨ
（ナイジェリア）24 歳
- 海ネプチューン（米国＜日本在住＞）25 歳

グローバル化社会の多様性と親しく

（原文は英語）

アダム・モスコー（14 歳）

カナダ・オタワ市

ネピアン中学校

「この人たちは誰？我々の仕事を奪っている。話し方が変だし変な匂いもする。」¹ 「この人たち」とは、我々の新しい隣人だ。

社会のグローバル化が加速し、ベルリンの壁が崩壊したように文化の壁が崩れ去るのに伴い、職場や日常生活の中で、多様な背景を持つ人々が運命共同体になってきている。分離するのではなく統合することの必要性、そしてただ単に我慢するのではなく敬意を払うことの必要性が、より明らかになっている。今日の若者が、グローバルなスケールで平等と協力的な繁栄の文化を育みたいと希望するのであれば、互いの違いを受け入れることの大切さを幼い頃から学ばなければならない。多様な若者の心を 1 つにすることは難しい課題だが、1 人ひとりが協力して一緒に取り組めば、「ダイナミックで調和のとれた多文化社会」を創造するという「夢」を実現できると私は信じている。

公平とは、「信仰、肌の色、民族性、性的指向などにかかわらず、すべての市民に平等を与えること」² を意味する。同様に、健全な多様性を確立するには、他者のニーズ、要望、感情に対する思いやりが必要である。礼節、少数派の保護、そして紛争の平和的解決が要求される。多様性にみちた社会は、人々がそれぞれ持つ豊かな可能性を実現できる環境を作り出す。完璧な人種というものなどない、「支配者民族」というものなど存在しないということを受け入れたとき、初めて「夢」は実現する。そして我々は、今日の子供たちには変化を促進する力がある、という信念を持たなければならないのである。

ハーバー・リーの小説「To Kill a Mockingbird（アラバマ物語）」に登場したジェムとスカウト・フィンチは、黒人と白人の間に存在する「昔からの」偏見をくつがえし、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの公民権運動を後押しする勢いを生み出すことの可能性を持つ子供として描かれた。2 人の子供はまた、毎日実践し唱える 2 つの貴重な教えを学んだ。他者の視点から世の中を見るということと、自分が他者に扱って欲しいように他者を扱うということである。



¹ Cheney, Peters. "Operation Colour Blind..." *Globe and Mail* 2006 年 6 月 10 日 F4

² 出所: www.takingitglobal.org

一方、思いやりと尊重の文化の実現に向けて、若者はどうすれば積極的に努力できるだろうか？「夢」への道は、偏見のない教育を実施し、手を差し伸べることにあると私は固く信じている。

学校という場所は大半の教育者が考えているより、もっと変化を起こすことができる可能性を持っている。それは、圧倒的に白人の多い町にあって、外国人を嫌う結束の強い学校から、都市部にある極端な多文化主義の学校まで多岐にわたる。これは特に、移民受入枠が大きいカナダに言えることである。たとえば、ある残忍な人種差別事件が発生した後、バンクーバーのある学校は、社会正義促進を目的として ROARS (**R**espect [尊敬]、**O**wnership [所有権]、**A**ttitude [態度]、**R**esponsibility [責任]、**S**afety [安全]) を導入した。ここでは、無知をそのまま放置して争いの火種にするか、それとも敵対関係を小さな芽のうちに友人関係に変え、より明るい未来を約束するかという選択肢がある。私が目指すのは後者であり、自ら手本となって率先して行くことである。

私は今、世界中の若者を奮起させることを目指したプログラムを作っている。「プラネット・ダイナミクス」というプロジェクトで、人は異文化間の対話を通じてこそ、調和に満ちた共存ができ、ますます狭くなる世界において平和への道に到達できるという信念を基盤としている。プログラムには3段階あり、それぞれが学級活動に組み込まれ、市民の意識向上を目的としたマーケティングとコミュニケーションキャンペーンによって補完される内容になっている。

探検段階（幼稚園～2年生）：世界の不思議や驚異を児童に見せる段階。遊びを通じて社会化のプロセスを強調し、目に見える少数派間のバリアを取り払うことに重点を置く。生徒は多種多様な文化の音楽や物語も学習する。

育成段階（3年生～中学2年生）：生徒は最近の出来事について積極的に論じ、宗教的信仰や伝統を探ることにより、健全な討論能力を育成する。異文化活動の可能性は無限にある。地域社会の精神的指導者の話を聞く、多文化的読書クラブ、音楽と食べ物の祭り、参加者全員が一丸となって共通のゴールを目指すスポーツチーム、協調関係を育てるリーダーシップ育成合宿、遠く離れた外国とのペンパルプログラムなどを通じて、生徒は世界を別の角度から見るができるようになる。また、中心となる学科カリキュラムには、国際芸術、文学、歴史、地理、外国語の学習も取り入れる。

リーダーシップ段階（中学3年生～高校3年生）：この頃には、生徒は異なる背景を持つ仲間と友人関係を作っていて、指導者の指揮の下、社会的耐性を促進するイベントを計画し、それぞれ独自の意見を積極的に発表することで、リーダーシップの役割を担う心構えができる。変化を促進する力は、「夢」を追求しつつ困難を克服できるほどに強固なものとなる。

私のビジョンは、「プラネット・ダイナミクス」によって今日の若者を感性豊かな明日のリーダーへと方向づけることである。これには資金的・政治的支援が必要であり、貧困、憎悪、疾病、非生産的政策決定といった状況の中にあっても、より良い未来を築いていこうという教育者の熱意にかかっている。子どもたちは応援を得て経験的に学習することによって、固定観念を打ち破ることができる。人種的に多種多様な子供たちが共存して協力し、世界が見習うべき手本を示すのである。子供たちは、イスラム教徒が祈らなければならないこと、シーク教徒が常に刀を持ち運ぶ必要があることを知り、

イスラエルとパレスチナの若者同士の緊張感にどう対処すればよいか、そして学校内の精神と結束をどう強化すればよいか分かるようになるのである。

皆さんは、変化に対する心構えはできていますか？

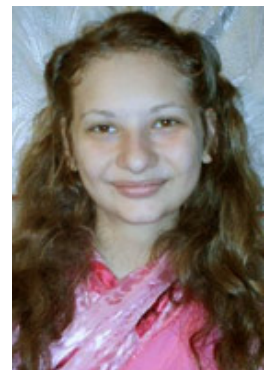
様々な肌の色の人が集まる差別のない多文化カフェでコーヒーはいかが？

（原文は英語）

グロス・ルシアーナ（18 歳）

ルーマニア・ブカレスト市

寛容と多様性の社会は集うことによってしか実現できません。そこで、「異文化カフェ」を随所に設けましょう。様々な国の若者が、コンサートや展覧会、ダンスや演劇を通じて祖国の伝統や文化をどんどん伝えることができるような場です。イベントを少なくとも 1 ヶ月に 1 回開催し、人種を問わず若者であれば誰でも自由に参加できるようにします。単に行くだけでもかまいません。



また、この「異文化カフェ」では、毎週末、作文や絵画、歌、落書き、スポーツのコンテストなどを行います。コンテストには、ある国の文化から連想されるテーマを設けたり、「平和」「コミュニケーション」「寛容」などの一般的なメッセージを含めたりするのもよいでしょう。参加資格は個人ではなくチームとします。このようにして、様々な文化背景をもつ若者が、互いに協力し、理解を深めることを学ぶのです。コンテストでは賞を出します。賞金でなくても、スポーツクラブの利用権やインターネットの無料アクセス、コンサートや映画のチケットでもかまいません。

こうしたセンターには、また、不登校生徒のためのクラスも設け、国籍の異なるクラスメートと同じ「学習グループ」に入ることを了承する/生徒なら誰でも無料参加できるようにします。若者自らが教師役になって、自国語を教えるのもよいでしょう。若者同士で学び合うことができるのは、新しい独特のアイデアであり、大勢が集まってくることでしょう。そうしたら、実際に言語の試験を行い、修了証書を出すようにします。

さらに「異文化」カフェでは、若者を対象とした動画・音声カウンセリングも無料で行います。誰でもコンピュータの個人アカウントにアクセスできるようにし、そのために特別に設けられた部屋で、カメラに向かって自分の悩みを話します。カウンセラーからの答えもビデオ録画されて翌日個人アカウントに送られます。ただし、相談者は他のティーンエイジャーから送られてきた相談に答えることを了解しなければ、カウンセラーからのビデオを見ることはできません。コンピュータプログラムが、様々な民族の若者を「引き合わせ」、互いにコミュニケーションをとり、助け合うようにします。ただしビデオメッセージは、すべて専門家がチェックし、下品な言葉を使ったり、不適切な答えをしたりする若者は無料カウンセリングの権利を失うようにします。若者は、大人のカウンセラーの前だと話

しづらいことも多いものです。「言葉を良く知らない、あるいは的を射た言葉を探そうとナーバスになるので作文は苦手」という若者もたくさんいます。そうした若者がビデオメッセージかボイスメッセージ（匿名性）のいずれかを選択できれば、自由に話をし、互いに尊重し合うことを学ぶでしょう。

仕事を捜している若者も大勢います。「異文化」カフェでは、若者向けの求人情報を揃え、就職希望者に推薦を出します。こうした「推薦」は、「若者本人が、真面目で、信頼ができ、正直な人物であることを保証するもの」としてすべての企業に考慮してもらう必要があります。推薦を得たい若者は、その前に人種差別反対のプログラムに3ヶ月ボランティアで参加するか、相互学習プログラムに参加しなければなりません。

人種差別反対のプログラムは成人のメンターの助けを借りて若者が率先し、「啓蒙キャンペーン」「新しい解決策・アイデア」、そして具体的な「コミュニケーション・交流」の3段階を踏みます。「啓蒙キャンペーン」では、若者に「なぜ人種差別と闘おうとしているのか」を説明するポスターのデザインやスローガンを考えてもらいます。（学校やショッピングセンター、クラブなど）自分が話をしたい公共の場を自由に選んでもらい、ラジオやテレビでも話ができるようにします。若者はマスメディアを富と成功に結び付けるため、このように公の場で話すことによって大勢の若者が集まることでしょう。2つ目の「新しい解決策・アイデア」は、若者グループから人種差別や差別と戦う独自の提案が生まれることを意味しています。それは、若者向けの国内・国際プロジェクトのアイデアかもしれないし、教育制度改革の提案あるいは新しい法律の可決を求める要請かもしれません。若者のアイデアを公表し、それを当局が実現に向け検討します。若者はアイデアが豊富ですが、「どうせ誰にも聞いてもらえない」と思って自分の意見を述べません。「異文化」カフェは、若者が本当の変革を決定できることを立証するものでなければなりません。最後の「コミュニケーション・交流」では、暴力と差別に終止符を打つ必要性について、注意を促すためのイベントを企画・実施する権限を若者に与えます。イベントは、フェスティバルでも、抗議集会でも、討論会でもかまいませんが、なるべく大勢の若者が参加し、対話を始める気にさせるようなものでなければなりません。

また、「異文化」カフェが討論会を企画し、様々な人種の若者に参加を呼びかけるのもよいでしょう。討論会では若いコミュニケーションの専門家が進行役を務めますが、討論会は気軽に参加でき、言葉を良く知らない若者でも簡単についていけるようなものにする必要があります。基本的に、若者に質問を投げかけ、自由に話せるようにします。若者を惹きつけるため、進行役、「本音を言える場所」であるという必要があります。進行役は、若者の怒り、憎しみ、不満、悩みの本当の理由を引き出すため、できるだけ多くの質問をする必要があります。これらの討論は、若者が抱える問題を当局やNGOに深く理解し、新しい戦略を立ててもらうのに役立つことでしょう。

最後に、すべての「異文化」カフェは、若者の問題を解決できる団体や当局に働きかけて、差別の犠牲者の力にならなければなりません。例えば、学校には、「いじめられている」と言う生徒に対して責任を持ってもらいます。若者が犠牲になっている路上暴力には警察に介入してもらいます。病院や企業、さらにはレストランやディスコといった公共の場にも差別をなくす対策を講じてもらいます。

もちろん、討論の後には、コーヒーやソフトドリンクをお出しします。

2006 年度国際ユース作文コンテスト

共に生きることを学ぶ：グローバル化社会における寛容と多様性の促進

(原文は英語)

ファティマ・ジェジェロラ・サンニ (14 歳)

ナイジェリア・ラゴス州

マフムッド・アフマディーヤ中学校

技術の進展のおかげで、世界はグローバルビレッジになりましたが、それゆえ、異なる国籍、人種、あるいは宗教であっても、人々は必然的に、一緒に生活して働くことから免れることはできません。

世界中で続発する暴動、殺害、家や財産の理不尽な破壊、たとえばスーダンで起きたダフル紛争は、寛容の欠如による結果でした。世界のある一部の人々が、民族や宗教などをめぐる意見の相違に乗じて、罪のない人々を虐殺したり、家財産を破壊したりすることが当たり前になっています。つまり、こういった人命の喪失や破壊が、宗教問題あるいは政治経済など世俗的問題を隠れ蓑に操られた暴力に起因することは明白なことです。

神様は国を差別することはなさらず、あらゆる可能性をすべての人種に与えてくださっています。地球はすべての人が生きる場所として作られています。こうした神様の特性は、お互いに親切に振る舞うべきであることを教えてくれます。世界の人々の大半は、イスラム教、キリスト教、仏教など、何らかの宗教を信仰しているからです。こうした宗教のどれも、暴力を容認したり、あるいは教えたりしているものは 1 つもありません。それどころか、すべての宗教が、平和的共存、寛容、人間性、愛、思いやり、分かち合い、そして社会秩序の尊重を教えています。

多くの若者が、親や保護者の目を通して異なる宗教や人種の人々を見ながら成長しますが、親や保護者自体が間違った情報を学んだが故に、他者の信仰や文化に対する偏見や誤解に満ちてしまうのです。

人間はそれぞれ互いに不可欠な存在であることを認めようとしないうえ、世界にはなかなか平和と調和が訪れません。ある国が災害に襲われれば、他の国もその影響から免れることはできないのです。

多様な文化や背景を持つ人々が一緒に平和に暮らす方法：

- 人類を分裂させるような宗教や文化の違いを強調するのではなく、それぞれに共通する価値観や教えに焦点を絞って取り組む。宗教を持たない人には、自然を鋭く観察することを奨励する。自然はそれ自体が常に平和だからである。
- 純粋な心、共感、善意をもって、互いに友人として振る舞う。
- 礼儀正しい行動、誠意、親切心を身に付ける。

- 他者が尊敬する神聖な人物、文化、人種の悪口を言ったり、侮辱したりするのをやめる。
- 国家は自国だけに有益な政策を避ける。たとえば、異なる信仰をもつ人々が一緒になるのを妨げる移民政策など。
- 人種や宗教にかかわらず、すべての人に敬意、愛、理解、寛容を示す。

私のような若い人たちは、次のような手段によって、ダイナミックで調和に満ちた多文化社会の創造に貢献できます：

- 私たち自身の中で文化的統合を促進する。たとえば、少なくとも2ヶ国語を学習するとか、大人になったら自分の国籍以外の人と結婚するのをためらわないなど。
- 地球規模の問題に焦点を当てるグループを作る。たとえば、HIV／エイズ問題、児童売買問題、労働問題など。
- 親や保護者の固定化した偏見や誤解の目、先入観にとらわれた話などを通して問題を見ないようにする。
- 他者は弱く自分は強いという考えを持たないようにし、思いやりと共感を身に付ける。
- 他者の長所や弱点を正しく認識して理解し、それに応じて対応する。
- 許しと無条件の愛の精神を身に付ける。
- 世界の様々な国にペンパルを持ち、様々な環境における問題や出来事に関する意見を交換する。
- 将来的に地位の高い人物になって国家の意思決定に加われるよう、真剣に勉強して良い成績をとる。

ダイナミックで調和に満ちた多文化社会を実現するため、私に始めることができるプロジェクトは次の通りです：

- 面白い文学作品、伝記、教材を読むことができ、他者の文化、信仰、歴史などを学べる若い人向けの図書館を設立する。
- 平和条約の調印を監視し、問題を起こす人に対して重い罰金や制裁措置を実施する強力な子供議会を作る。
- 「平和のメッセージ」という名前の月刊誌を始める。南アフリカのデズモンド・ツツ博士のような世界の著名人に寄稿を依頼し、豊かな経験を聞かせてもらう。出版する記事は、世界中の子供たちから募集する。
- 連帯を奨励し、社会的交流と平和的共存の促進を目的とした若者のネットワークを作る。

世界の文化、人種、宗教の多様性は非常に豊かで美しく、正しく認識して評価すれば、世界は実に平和な場所になるはずです。世界人類が平和でありますように！

やさしさと勇気

(原文)

徐 由 (ソウ ユウ) (11 歳)

韓国<東京都在住>

新宿区立西戸山小学校

最近、家族で話題になった新聞記事*があります。『移民の子供送還に「ノン」』という見出しで、フランスで、滞在資格がない移民家庭の子供の里親になる運動が急速に広がっているという内容です。フランスには、アルジェリアなどの北アフリカからの不法滞在外国人が多く、フランス政府は、この人たちの強制送還に力を入れています。



送還対象になりそうな子供が通う学校では教師や父母でつくる支援団体が続々と発足しました。里親に登録したり、署名運動をしたり、集会を開くなどして、送還対象の子供たちを助けようとするのです。

新聞には、写真ものっていて、その下には『パリのカルチエラタンで 5 月 31 日、強制送還になりそうなアルジェリア系移民のクラスメートの支援を訴える小学生たち』と書いてありました。

この記事を読んで、父は、「フランスは人権意識の高い国だね。」と言い、母は、「他人のためにそこまでするなんてすごいね。」と言っていました。

私は、友達を助けたいという気持ちがあっても行動に示すのは勇気が要るので、フランスの子どもたちはすごいなあと思いました。

東京にもいろいろな国の人がたくさん住んでいます。その中でも私の住んでいる新宿区には、実に様々な国の人がいます。そして職業もいろいろです。英語の先生、シェフ、掃除やベビーシッターなどです。

私の家の近くには、インド、ベトナム、タイ、アフリカなどいろんな国の料理店があります。

インド料理店の前を通る時、インド人のおじさんが一生懸命にナンを焼いていて本当においしいそうです。

タイレストランで「トムヤムクン」という料理名を聞いて、思わず笑ってしまいました。発音がおもしろかったからです。

また、駅前のビルでは、一生懸命お掃除をしている南米のおばさんやおじさんたちも見かけます。

* 平成 18 年 6 月 8 日 朝日新聞

大通りには、韓国や中国の留学生たちが楽しそうにおしゃべりしながら歩いています。

みんな遠くからやって来てがんばっているのです。国や言葉や風習はちがっても、みんな私たちの町の住民です。

私たちはこの人たちのおかげで、いろんな国の料理を食べることができるし、生活習慣や文化などを知ることができます。

しかし、この人たちの中には仕事や生活が大変なために、自分たちの子供の世話さえもできないこともあるそうです。外国で言葉も通じず、さびしい思いをする子供たちも多いのです。

私もフランスの人たちのようにこの子供たちを助けるべきだと思います。

今、私に出来ることは、この子供たちに日本の言葉や文化をやさしく教えてあげることです。

私の母も、初めて日本に来た時、日本語が分からなくて困っていましたが、多くの人々に助けられたそうです。

私も母を助けた人々のように、やさしい心を持ちたいです。そして、新聞記事のフランスの子どもたちのように、思いやりと勇気のある人間になりたいです。

このようなことにずっと関心を持ち続けていこうと思います。

心の中に平和のとりでを

(原文)

備前 陽子 (24 歳)

大阪府

大阪大学大学院

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでをきずかなければならない」

UNESCO 憲章前文より

「私はこう思うわ。」「そっか。でも僕はこう思うよ。」アラブ首長国連邦ドバイにあるインターナショナル・スクールでの歴史授業。中学校まで日本で過ごし、日本製の「歴史」をノートにまとめるだけの授業を受けてきた私は、このように個人の史的認識を授業で表明し議論する光景に驚きを覚えた。そこでは生徒たちの間で、それぞれの国や宗教、民族などを背景として、それぞれに異なった歴史観があるという共通理解が生まれていた。



総人口の約 80%が周辺諸国をはじめとする他国籍の人々で構成されたアラブ首長国連邦のインターナショナル・スクールであるからこそ、このように一つの歴史的事象について、原因・過程の分析や史実の評価をめぐる、自由な議論を繰り広げられる環境が整っていたと言えるかもしれない。

しかし、環境だけが重要な要因だろうか？確かに多国籍で構成された場所に住むことになれば、ある程度は異民族や異文化と共生する心構えが人々の中にあるのかもしれない。しかし、私は恥ずかしいことながら、ドバイがどんな場所なのか、ほとんど知らずに移り住んだ。だからこそ、国家間が緊張関係にあったイラン人・イラク人や、パキスタン人・インド人は「仲が悪いはずだ」とか「好戦的かも知れない」「怖い」と、友人達を一方的なステレオタイプで捉えてしまっていたのだ。友人達も、最初は私をいわゆる「日本人」として見ていた。しかし、部活や生徒会を通し、多国籍の友人と様々な関心を共有し協力できたことで、あらゆる偏見を取り払い、友人達も私も互いを「〇〇人」としてではなく、一個人として捉えることが可能になった。

一般に、グローバル化の下で世界が平準化することへの抵抗感から、各地で閉鎖的な自民族中心主義が高まっているように思われる。このドバイでの高校生活があって、多国籍の友人と人種や民族、文化、宗教の違いを認識しながらも、その違いを尊重し同じ人間として付き合い合えたからこそ、私の中

に「平和のとりで」が築かれ、「暴力の連鎖」が続く国際情勢にあって、他者を「野蛮」とか「非文明的」として排除することに同調しない自分が形成されたのかも知れない。

私は大学院で、中東における和解と相互理解のための教育を研究している。たとえば、イスラエルでは、対立関係にあるユダヤ系の学生とアラブ系の学生の交流事業が取り組まれている。「平和のオアシス」村にある「平和学校」のプログラム³。これには、毎回ユダヤ系・アラブ系各 30 人の学生が 3 日間の予定で参加する。参加者は、両集団から同数が参加する 4~5 のグループに分けられ、互いを知ることから始まり、集団として文化や政治対話について議論したり両者間の社会的・文化的諸問題に関する擬似交渉を行ったりする。毎年合計約 1,000 人がこれを体験している。

こうした活動は貴重ではある。しかし、このように自己の所属する集団の文化を紹介したり、自分達の苦しみの歴史を伝えるだけで、他者に対する寛容を生み、多様性を尊重できる社会を達成しえるだろうか？

たいていの場合、交流は自己紹介から始まるが、そこでその人が帰属する国家や民族の名称を省略すれば、少数派・多数派の枠組みから自由になり、教育やメディアを通じて植え付けられた偏見を持たずに付き合えるのではないだろうか？これは、閉鎖的な歴史観を乗り越える契機にもなるだろう。

もちろん国家レベルでも、かつて敵対関係にあったドイツ・ポーランド間での歴史対話のように、相互の偏見や敵愾心を高めるような自国中心の歴史を、相互理解を促す開かれた歴史に転換する努力も重要である。しかし、そうした対話の実践は、柔軟性に長けた若者だからこそ取り組むべき課題ではないだろうか。

たとえば、若者を中心とする多国籍・多民族の「混ぜこぜグループ」で歴史的な土地を訪問し、多数派にとって常識的な歴史認識と少数派の歴史認識とを対比したり、多数派に知られていない史実を発見するような歴史フィールドワークも有益ではないかと思う。それは、文化や国籍の違いを認めるのと同じように、一つの歴史的事象についても異なる認識があるということを知り、その違いを尊重して相互理解することに繋がるであろう。そしてそれは、対立集団間の和解をももたらしてくれるだろう。表面的な文化交流にとどまらない、共生のための対等な対話。平和のとりでを心の中にきずこう。

³ 「平和のオアシス」村 URL : <http://nswas.org/> 平和学校 URL : (<http://sfpeace.org/index.php?lang=en>)

共生を学ぶ: グローバル化社会における寛容と多様性の推進

(原文は英語)

ムスタファ・オモトラニ・マリウム (23 歳)

ナイジェリア・オグン州

オラビシ・オナバンジョ大学

人生は不思議の宝庫! 家族の何と素晴らしいこと。父母や子どもたちなど全員が愛に満ちた優しいケアを経験します。

方向性、文化や信仰の違いや多様性をすべて忘れ、まったく見知らぬ 2 人が夫婦として一緒に生活し、世界で最高の家族を作ろうと決めた結果であることは、忘れてはなりません。

それから間もなく、「子ども」という名の見知らぬ人間が加わっても、自分たちを家族と言います。

なぜ家族なのでしょう? 家族は、一緒に住むことは、1 人ひとりの個性を寛容に受け入れなければならないことを知っています。意見や出身は違っても、それぞれを「自分たちのもの」つまり「家族」として受け入れることで一緒に暮らすことができるのです。

私の祖国ナイジェリアでは、文化的・社会的価値観や宗教の異なる 400 以上の民族が 1 つの国家という傘の下に暮らしています。こうした国では、「なぜ寛容をもって共生する必要があるのか」を理解するのは難しくありません。

私の国では、民族抗争や暴力的な宗教衝突、政争などにより何十万人もが命を落としました。他のアフリカ諸国、そして世界全般でも状況は同じです。テロ事件や戦争、人為災害が繰り返されています。年齢を問わず、人の死を目の当たりにするのが日常茶飯事になっています。それに対して誰も疑問を口にしない。なぜでしょう?

どこかで、何となく「自分たちは家族である」ということにまだ目をつぶっているのではないのでしょうか。今でも民族の違いで差別し合い、自分たちの小さな集団に属していないという理由で相手の弱みにつけこみ、仲間への影響も考えずに自分勝手な利益を追求しています。これでは人々に不満が溜まるのも当然です。

では、こうした現実の中で、平和に暮らすにはどうしたらよいのでしょうか?

私の家族はたった 4 人ですが、私は、この小さな家族の中で姉(妹)を毛嫌いしていました。特に理由があったわけではなく、ウマが合わなかっただけです。この状態は、我が家と同じような家族構成の知り合いの家を訪ねた時まで続きました。この家では、2 人の娘さんが自然に心を通い合わせ、とても仲良くしていました。その時の情景は「人生って本当に素晴らしい」と語りかけていました。

その時、自分のたった 1 人の姉(妹)との関係に思い至り、「変えたい」と思いました。「変える」

と一言で言っても、簡単なことではありません。私は、彼女の人格を受け入れ、彼女の極端なところを許し、自分の行動に責任を持つことにしました。それ以来、私たちの関係は良好で、今では、家族の中に本来あるべき一体感を持った本当の姉妹になっています。

自分の家族でこのようなことがあった後、さらに一歩踏み出す決心をしました。自分の家族の中でできるのであれば地域でもできるはず。そこで、学校で影響を与えることを決め、学部の様々な取り組みに関わるようにしました。

その後、学部の副委員長になって、様々な利益、文化、宗教、背景を持つ人々に対応しなければならなくなるのですが、これらの違いを乗り越えて、全員が一丸となって動く方法を見つけ出さなければなりません。

手始めに行ったのは教育です。学部長や講師、その他上層部の協力を得て、一連の講義やセミナーを企画・実施しました。それは大成功でした。学生の態度に変化が見られるようになったのです。

一朝一夕とはいきませんでしたが、自分たちの相違点を忘れ、それより共通点を優先するようになり、そのうちお互いがお互いを必要としていることに気がついたのです。

「学部でできたのだから、もっと大きなコミュニティでもできるのではないか」と私は奮い立ちました。

コミュニティのオピニオンリーダー、酋長、最高指導者の協力があれば、様々な場で、生徒、職人、若者、市場の女性、さらには高齢者に会えるはずです。私は、共生と寛容を妨げている様々なことについてこうした人々を啓蒙したいと考えています。

「多様性の中の統一」に関するセミナーや講義の開催を目指し、学部で得られたような結果を得たいと考えています。

1 本の樹で森ができないように、私たちの資源を使い、社会の恵まれない人々も尊敬されるべき世界市民の仲間として意義ある生活ができるような社会にするために、私は変革をおこしていきたいと思っています。

この方法が世界で認められる日が来るのを楽しみにしています。みなが他者を 1 つの「世界家族」の一員とみなすようになる日、文化、宗教、言語の障壁、国籍、人種に関係なく、全員が尊敬される世界市民として生きる日です。

外国に移住しても、移民として見られることはなく、「世界家族」の仲間である市民として見られることになる日。差別がなくなり、「騙された」「無視された」「孤立させられた」などと感じた人々の間に爆発的な衝突が生じなくなる日。

それが、私の信じている世界です。これこそ世界のあるべき理想の姿。故ンナムディ・アジキウェ博士が作ったこの歌を誰でも心から歌える世界です。

私の人生は楽しかった
どこに行っても
親切な友人や敵と仲良く
暮らすことを学んだ

人生は進み人間は揺らぐ
空中の原子のように
私たちは日々を生きなければならない
空中の悪魔を払いのけて

私たちって本当にそんなに違うの？

(原文は英語)

ナデズダ・ネウシピナ (11 歳)

ロシア・モスクワ市

第 429 小学校

人はそれぞれ違いますが、みな人間で、イスラム教徒やキリスト教徒や仏教徒です。私は外国に住んだことがあり、様々な国籍の人に会いました。そして、私たちはみな、それほど違ってはいないことを学びました。

私はロシアで生まれました。母は中央アジアのトルクメニスタン出身です。私は 7 歳になるまで、両方の国を行ったり来たりして過ごしました。ロシアが寒いとき、母は私をトルクメニスタンに住むおじいちゃんとおばあちゃんのところへ連れて行ってくれました。夏にはロシアに戻ってきました。トルクメニスタンで幼稚園に行き、トルクメン語も話せるようになりました。その後、母は 2 年間アメリカに留学し、私も母と一緒に行了きました。

アメリカではジョージア州に住んでいましたが、隣近所には世界中からやってきた人がたくさん住んでいました。中国人の男の子のアンディ、グアテマラ人の女の子のサマンサ、2 人のロシア人は私とユダヤ系ロシア人のユージーン、モンゴル人の友だちのノマ、インドから来た 2 人の兄弟のハーポールとマヌ、2 人のアメリカ人で黒人のジョーとナヤ。私たちは一緒に生活し、友達同士でした。国籍や宗教で分かれることはありませんでした。男の子と女の子で分かれていました。女の子はみな同じことが好きで、可愛く見られたいと思っていて、学校や男の子たちのことについておしゃべりし、週末には友だちの家に泊まりに行くのが大好きでした。男の子たちはみなスポーツをやっていて、いつも勝ちたがっていました。私たちの親たちも、お互いにあまり違いませんでした。お母さんたちはいつも私たちに、勉強しなさいとか、お行儀よくしなさいとか言っていました。家の中をきちんと片付けてきれいにして、お父さんには家に早く帰ってきて欲しいと思っていて、ときどき買い物するのが好きでした。お父さんたちは良い仕事を見つけようとし、お金を稼いで家族を養っていて、しっかり勉強するよう言っていました。教会はそれぞれ別々のところへ行っていました。それは大きな問題でしょうか？

私は今、ロシア人、中国人、アフリカ系アメリカ人、モンゴル人、インド人、スペイン人、ユダヤ人、アメリカ人の違いは何だったのかと考えています。たぶん、食べ物かもしれません。最初にアパートへ引っ越したとき、国際フードパーティがありました。それぞれの家族がそれぞれの国のごちそうを一品持ち寄って、食べ物や国のことを紹介するというパーティです。とても楽しいパーティでし

た。私たちはテーブルからテーブルへ走り回り、親たちは食べ物を味見したり、新しい友だちを作ったりしていました。お互いを知るにはとても良いやり方だったと思います。

やがてアメリカを去らなければならない日がきて、友だちとも別れなければなりません。今では、私にとって様々な国にはそれぞれ顔があるようになって、それは友だちの顔です。インドのことを聞くと、2人の兄弟ハーポルとマヌを思い出し、モンゴルについて書いたものを読むと、ノマの笑顔を思い出し、テレビで中国のことを見ると、アンディとチェスで遊んだことを思い出します。友だちの国だったら、その国を嫌いになることはできないと思います。その国の人を個人的に知っていたら、人は互いを嫌い合うのはやめると思います。大人になって「敵同士」になるかもしれないなんて、考えたくもありません。

なぜそのようなことが起きるのでしょうか？そして、どうすれば、そのような問題を解決することができるのでしょうか？違う国の人々が互いに嫌い合っても、どうすれば子供たちは互いに仲良くできるのでしょうか？嫌い合うのをやめて平和に暮らすには、互いをもっとよく知り合うことが必要です。様々な国の人を結び付け、一緒に働いて暮らせるようにする組織をもっと作るべきだと思います。そのような組織では、外国人と地元の人々が協力します。休日や誕生日があって、良い日も悪い日も分かち合います。そうすれば、やがて人々は互いに対する悪意を忘れ、それぞれの間にさほど違いがないと思うようになるでしょう。

何ヶ月にもわたってすべてが雪におおわれるロシアの長い冬。私は学校から帰ると、インターネットを開いて世界中の友だちからの E メールを読みます。まだアメリカにいる子もいれば、それぞれの母国に帰った子もいます。

私は今、ロシアのクラスメートをアメリカでのクラスメートに紹介し、インターナショナル・インターネット・クラブを作ろうと思っています。互いにメールを書き、英語を練習し、新しい友だちを作り、異なる文化について知ることができます。様々な国に住む子供たちとつながりを持てるようになります。友だちになり、互いの国を訪問し合い、大人になったら一緒に仕事をするようになるかもしれません。インターネットは国境を砕き、人と人の間の境界線をも取り去るのに役立ちます。多くの人にとって外国が顔、友達の顔を持つようになります。そして顔は心を持ち、心は他者に対する友情と愛でさらに大きく成長していくことでしょう。

「謝謝」からの第一歩

(原文)

鈴木 恵梨奈 (12 歳)

日本<中国大連市在住>

大連日本人学校

「中国の人はこわそうだな。」これが私の中国に来る前の中国人の印象です。それは、忘れられないニュースの報道が、私の頭に焼きついていたので。「どうして一生懸命戦った選手にペットボトルを投げるの?」「スポーツは世界を結ぶ架け橋にはならないの?」。こう感じたのは、中国人が試合を終えた日本人選手を取り囲み、反日感情をむき出しにした言葉を浴びせ、暴動のような行動をとったのを目の当たりにした時でした。この報道を見て、悲しく思うと同時に、中国に対してあまり良い印象をもたなかった日本人が私の外にもたくさんいたと思います。

だから、私が中国に来て一番驚いたことが、中国人の優しさでした。例えば、買い物に行った時、お店のおばさんが、中国語がまだうまく話せない私たちに、まるで友達のように話しかけてくれました。また、バスの中では男の人も女の人もお年寄りや小さな子どもに席を譲ってあげていました。ちょっとしたことだったかもしれないけれど、私はとても感動しました。ニュースの報道だけで、中国の人をこわいと思っていた先入観、日本人の立場からだけ見て、中国の人を勝手に悪いと決めつけていた自分自身を反省しました。

私は今、日本を離れて中国で暮らす機会を与えてもらったこと、そして、中国の人から、世界のいろいろな国の人々を勝手な先入観をもって見てはいけないと教えてもらったことに、とても感謝しています。それと同時に、優しい心をたくさん見せてくれる中国人と、どうしたら仲良くなれるかを考えるようになりました。

私の住む大連では、タクシーの運転が乱暴で交通ルールを守らなかったり、バスの運転手やお店の人がお客さんと口げんかをしている場面をよく見かけたりするなど、日本では考えられないようなことに出会い、びっくりすることもあります。でも、それ以上に心にうかぶのは優しい笑顔でお店に立つおばさんや、親切に席を譲るお兄さんの姿です。すると、なぜかタクシーやバスを降りるときも、「謝謝 (シェイシェイ)」と自然にあいさつできるようになりました。「謝謝」と言うと、さっきまで怒ってでもいるかのように乱暴な運転をしていたタクシーの運転手さんも、お客さんと大声でけんかをしていたバスの運転手さんも、後ろを向いてうなずいたり、にっこり笑って手を挙げたりしてくれるのです。そんなとき、言葉も通じない運転手さんがとても身近で親しい人のように感じられます。

だから、本当にちっぽけなことかもしれないけれど、私は「謝謝」という言葉を言い続けていき

いと思います。そんなちっぽけで当たり前のことでもやり続けることで、きっと心と心がつながっていくのではないかと思います。

戦争で、多くの中国人を苦しめてしまった日本人。そういう事実は消すことができないと思います。でも、21世紀は、私たち中国に住む日本人が、「謝謝」を、大連、そして中国全体に広げていけたら、お互いのよさをもっともっとよく理解できると思います。

日本を離れてもうすぐ2ヶ月がたちます。「中国の人はこわいんだ。」と思っていた自分も本当の自分だと思います。だから、中国に来る前の気持ち、中国に来たばかりの頃の気持ち、そして中国人の優しさに触れた時の気持ちの変化を、しっかり心に刻んでおこうと思います。それと同時に、人や文化や環境は、その国に行っているいろいろな体験を積み重ねることで初めて本物の姿が見えてくるのだということを肝に銘じておきます。

「中国の人は優しいです。」と胸を張って言えるように、「謝謝」をはじめの一歩とし、中国語で話をしたり、握手をしたり、笑顔を分け合ったりして多くの中国人と接し、お互いを理解し合っていきたいと思います。

世界平和を可能にするには

(原文は英語)

レベッカ・N・ドロビンスキ (11 歳)

米国テキサス州

エンタリング・オースティン・アカデミー

いつになったら、世界平和は私たちの生活に訪れるのでしょうか。それは、簡単なことで、一緒に働くことです。世界を平和にするために、私たち子どもが学ばなければならないことは、お互いに仲良くすることと、人の外見や信仰、思想、行動、生活、または信条によって判断しないということです。私たちは、お互いにそれぞれの生活を尊重して、文化や信じていることに干渉しないことが大切です。他の人のあるがままを認め、自分たちの信じていることを押し付けたりしてはいけません。

活気にあふれ調和した多文化社会をつくる為に、若者はどのような貢献ができるでしょうか。

あるプロジェクトにたった一人で取り組むのは、とても大変なことかもしれません。世界平和のためのプロジェクトならなおさらです。世界平和への目標は、一人から始まります。そして、このプロジェクトに私の友だちが参加します。その次には、その友だちの友だちが参加します。そして、いずれは、私たちの行動が 1 つの変化をもたらすでしょう。他の人も変化に気づき、参加へと動かされるでしょう。こうして、目標は達成されるのです。若者が一緒に同じ目標に取り組むほうが、簡単に達成されます。

異なった文化や経歴を持つ人々が、共に平和に暮らすにはどうすればいいでしょうか。

私の母は、最近ニューヨークを訪れました。そして、そこでは、170 もの異なった文化の人々が、隣り合って平和に生活し、働き、そして礼拝していることを知りました。彼らはどのように平和を実現したのでしょうか。私は、子どもが他の人を裁いたり、からかったりするの、彼ら自身が何かを隠そうとしているか、恥じているのだと思います。人はみな、弱さをもっています。私たちは、お互いに助け合ったほうが、はるかに生きやすくなります。

また、私たちは、他の人の感情や肉体を傷つければ、自分たちの弱さをばかにされることはないと思っています。否定的な意識を、自分からそらすことができます。人は私たちのことを恐れるあまり、私たちの弱さに気づかないかもしれません。お互いに助け合うことを決めたら、自分たちの弱さを隠す心配は不要になります。私たちがどのように考え、行動し、生活し、信じ、祈り、そして見たとしても、私たちはみな弱さをもっているのです。

お互いあるがままに

世界を平和にするために、私たちは、どんな生き方を選択しようと、お互いに本来あるがままを認め合う必要があります。一度、本当の私たち自身をお互いに受け入れることを学べば、人類は世界の平和を創造できるでしょう。寛容と慈悲を持ってお互いを見て、批判はとどめておかなければなりません。隣人が、私の信じていることを変えさせようとしない限り、私は隣人に寛大でいられます。お互い、あるがままに。

この目標を達成するために、どのようなプロジェクトを始められますか。

世界平和の目標を広めるために、私は、地球の小さな写真とピースサインをつけた、いろんな色のゴム製のリストバンドを作ろうと思います。リストバンドの周りには、いろんな肌の色やサイズの人々が手をつないでいる絵にします。これは、人類が世界平和の目標に向かって、一緒に取り組んでいる姿を現します。このリストバンドが、世界平和の目標のこと、そして、このブレスレットを着けている人たちから始めるのだと思い出させてくれます。

このプロジェクトを、まず、私の教会から始めようと思います。宗教教育担当のディレクターに頼んで、教室で私のアイディアの話をさせてもらおうと思います。世界平和を広めるために、お互いに慈悲と寛容を持って生きること同意してくれた人は誰でも、このリストバンドをもらえます。そして、それぞれが、自分たちの友人や家族にこのプロジェクトのことを伝えていきます。このプロジェクトを支援してくれる人はみな、1ドルで1つのブレスレットを受け取ります。最初のブレスレットの制作費を払うために、地域の企業に支援をお願いしようと思います。プロジェクトは、教会から教会へ、学校から学校へ、地域から地域へ、州から州へ、そして国から国へと広まっていくでしょう。もし、最初から海外の人も加わってくれたら、このプロジェクトはいろいろな方向から始められるでしょう。このように、子どもたちが一緒に取り組むプログラムを作ることで、世界平和は可能になるでしょう。私たちの世代を、ピースメーカーとして知られるようになろう。

いろいろな国の人々と仲良く暮らすには

(原文は英語)

バビングトン・オモトラ (13 歳)

ナイジェリア・ラゴス州

ロニック・コンプリヘンシブ中学校

違いは、人生における、新たな発見への扉を開く課題を生み出します。

世界は多様性に満ちた袋のようなものです。多様性とは、単なる人種の違いだけではありません。言語や関心、宗教、衣装などの違いも含みます。私たちはみな、外見が違いうように内面も違います。

ある状況を他の人の視点から見られること、そして、人と仲良く付き合うことは、調和した社会を創るのに必要なステップの一部です。人の心がもっとも深く求めていることは理解されることです。誰もが、国籍や言葉のアクセント、衣装の様式に関係なく、自分のあるがままに尊敬され、評価されたいと願っています。「人はあなたがどれほど知っていようが気にしない。あなたが彼らのことをどれほど気に掛けているかを知るまでは。」という格言があります。

他の人を自分勝手な理由で肉体的、あるいは感情的に利用したり見下したり、人生を競争とみなしたりすることにより、不信や苦痛、屈辱の永遠に続く連鎖が創り出されてしまいます。

違いによって脅かされる人たちもいます。人は、不安から自分と違う人々をあざけて楽しみます。不安があるから、他人の成功をねたんだり、脅威に感じたりします。彼らは、必要となれば乱暴なこともためらわないし、同じような考えのギャング団に加わったり徒党を組んだりします。

誰もが他人と違って権利を持っていると信じている人たちもいます。彼らは違いを避けることもしませんが、それを受け止めることもしません。もう少しのところまでは来るものの、決してお互いを高めあうところまではたどり着きません。なぜなら、彼らは、違いを潜在的な強さとしてではなく、障害と見てしまうからです。

私たちは、違いをたたえ、尊重すること、そして、弱点ではなく長所と受け止められるよう学ばなければなりません。違った考えを持つ 2 人のほうが、似たような考えを持つ 2 人よりも多くのことを達成できます。違いをたたえることは、その違いに同意するということではなく、ただ、そこに価値を見出すということです。

その相手は、嫌味な隣人かもしれないし、通りの角の浮浪者かもしれないし、学校の転入生の女の子かもしれません。あなた自身かもしれません。

相乗効果は偶然に起こる訳ではありません。それは過程であり、多様性をたたえることによってそこに至る基礎が築かれるのです。相乗効果をもっとも有効にするには、あなたのアイデアを他の人

と共有する前に、まず他の人を理解しなければなりません。他の人の言葉を批評したり、選り好みすることなく、人の意見をよく聞くべきです。

人種差別は世界のもっとも古い問題点の一つです。友だちのグループが自分たちと少しでも違う人たちをみな拒絶して排他的になり始めると、問題に発展するのです。

相乗効果を得るためにしなければならないことは、

他の人の視点に耳を傾けること

問題点を明確にできること

可能な解決方法を提供すること

あなた自身を表現すること

妥協点に達すること

だれかを、愛されていて特別なのだと感じさせることによって、二人の人間が幸せになるのです。

世界平和は不可能

(原文は英語)

クララ (ジュンヒュン)・キム (14 歳)

韓国<ニュージーランド・オークランド市在住>

エブソム女子中学校

どうしたら、文化、宗教、人種や国籍も違う人たちが、憎しみや偏見を持たずに共に暮らすことができるのでしょうか。私たちは共に暮らせるのでしょうか。多民族からなる一つの世界に住むことは可能でしょうか。

私は小さい頃から、この疑問が実現可能か、ずっと考えてきました。私がこの作文を書くことで、周囲の人々や私たちの友人、家族、それに未来の子どもたちが、偏見や差別をなくし、寛容と愛をもって共に暮らせるための一歩を踏み出せる助けになると信じています。

私の家族は、私が2歳の頃、韓国からニュージーランドに移り住みました。私はとても小さかったので、目や肌の色、髪の色が違うことや、私の両親が英語がよくしゃべれないというだけで、その他は普通のキーウィー (ニュージーランド人) の女の子として育ちました。家で韓国語を話していても、私は自分がキーウィーだと思っていました。小さい頃から友だちと同じように育ってきたので、私のなかでも同じキーウィーだと思っていたのかもしれませんが。幼稚園でも、何かが変わるとは知りませんでした。小学校に上がると、男の子たちにいじめられるようになりました。

「アジア人！アジア人！吊り目と一緒に国に帰れ！」とからかわれ、悪口を言われました。

このような言葉に泣いたり、怒ったりしましたが、数年後には、私は人と違うのだと受け入れるようになりました。友だちが慰めてくれても、私はいつも、彼らと同じではないとわかっていました。私はいつも、私と学校の子たちの間には線が引かれていると知っていました。差別があるとわかっていました。私はそれを受け入れました。でもどうして？なぜ、私はそんなことを受け入れなければならないのでしょうか？どうして、私たちは差別を受け入れなければならないのでしょうか。私たちは、このようなひどい偏見や差別を認めるべきではありません。神は、私たちをみな同じに作りました。私たちはみな同じ人間です。だからこそ、私たちは世界を平和にする必要があるし、たとえ名前の発音がわからないような人とも隣り合って生きなければならないのだと思います。

世界平和 // 世界：地球上の居住者、人類。平和：口論や不和からの開放、調和した関係、ルームメイトが互いに平和に暮らす。 (www.dictionary.com)

世界平和とは、人類が争いや不和から開放されて暮らすことです。もし、世界中の人が世界平和を信じたなら、それは実現できると私は本当に信じています。他の人を思いやることができない人たちや欲深い人たちが、世界が平和になるチャンスをつぶしているのです。もし、私たち全員がわずかも協力しあって行動に移したなら、実現できるのです。これは、とても複雑な課題で、一晩で起こることではないでしょう。時間と忍耐が必要です。

世界平和に一步近づくことで、共に生きることを学ぶでしょう。共生のための第一歩は、他の人を、そして異文化を持つ人を自分の生活に受け入れることでしょう。

人々を自分の生活に受け入れることは素晴らしいことですが、私たちはもっとなにかできるでしょうか。若者はどんなプロジェクトを始められるでしょうか。世界を多文化が共存する場所にするために、若者はどのように貢献できるでしょうか。私はいつも、世界平和に向けて進んでいけるのか疑問に思っていました、もう既に向かい始めていると気づきました。かつて、黒人と白人の間には厳しく線が引かれていましたが、今では共にいられます。この偏見の世界を、愛し合う寛大な一つの家族に劇的に変えられるようなことがあるとは思っていません。愛が一番大切なステップになるでしょう。もし、誰もがお互いに愛し合って、憎しみを捨て去ったら、世界を平和にできます。もし、全ての人が互いを愛し合うことを学び、家を超えて外国人の隣人に話しかけたなら、グローバル化社会で共に生きることを学ぶでしょう。学校で友だちのいない子に話しかけ、友だちになりましょう。通りで寂しそうにしている人に話しかけ、彼らの国のことを尋ねましょう。一つのわずかな会話が、世界を平和にする最大の一步であり、多文化家族への最大の一步となるのです。

「共に生きることを学ぶ：グローバル化社会における寛容と多様性の促進」

グローバル化社会に共に生きることは、世界全体にとっては簡単な課題ではないし、時間もかかることでしょう。しかし、個人にとっては簡単なことなのです。一つのわずかな会話、一つの小さな善行だけでいいのです。人は世界平和が不可能な課題だと信じています。私は、不可能とは、できることが何もないことだと信じます。

思いやりで怒りを鎮めよう

(原文は英語)

アントン・グラモビッチ (17 歳)

ベラルーシ・モギリョフ市

第二高等学校

地球は私たちの忍耐強く、優しい母。地球の数知れない顔である広い海、暗い森、広大な砂漠、雄大な山々は、人間の奥にある感情を呼び覚まし、もっと頑張らなさいと囁きかけ、調和という不思議な恵みを与えてくれています。しかし、いたずらっ子の常であるように、人間は、その母から「平和」の資質をきちんと受け継ぐことなく、むしろ「怒り」を大きく増幅させて受け継いでしまいました。残念ながら、人間の心の中には、開きつつあるつぼみのような忍耐や優しさよりも、怒りを爆発させる火山や竜巻の圧倒的な猛々しさが見られます。破壊ほど努力の要らないものはなく、創造ほど平和的で難しいことはないことを思えば、これはごく自然なことです。

何世紀にもわたる歴史の中で、人類文明は、多くの、比較的小さな共同体に分裂し、発展してきました。そして、こうした共同体は互いに混じり合うことをせず、他とは孤立して存在してきました。今日、民族が互いに、姿かたちや周囲の現実の認識の仕方において異なるのはそのためです。しかし、20 世紀に入って地球の生活は大きく変わりました。政治経済のグローバル化と科学技術の進歩が平行して進み、積極的に国際協力が行われるようになりました。ところが、残念なことに、それに伴う副作用も表面化しました。そして、人間の怒りはそこに投影されています。平和的に協力できるところで熾烈な競争が展開され、友情の代わりに果てしない憎しみが渦巻いています。そこで最も紛らわしいのは、繰り返される破壊的な戦争の中で、人類は、人種に対する偏見という最も非人間的で、グローバル化された今日の社会に通用しない、危険な武器を放ってしまったということです。

一国の伝統、その文化、宗教、言語はその国の道徳観や生活様式を左右します。国によって発展の仕方が異なり、国民性が異なることも多くあります。国際化に伴い、民族間の対立はこれまでになく緊張しています。ナチスによるユダヤ人とスラブ人の大量虐殺、旧ユーゴスラビア、北アイルランド、ルワンダの民族抗争など、その例は枚挙に暇がありません。

しかし、もっと奇異なことがあります。それは、「人種の対立は、国家間よりも国内の異民族間で多く生じている」ということです。少数民族に対する差別、移民に対する偏見を抱き移民を侵入者とみなす態度は、今日でも広く蔓延しています。こうした事態を回避する対策を講じなければならないことは明白です。国に対する誇りが人種に対する偏見に変わるのを許してはなりません。

1. 予防に勝る治療なし

対立の予防は対立の解決よりかはるかに難しいことは肝に銘じなければなりません。予防によりたくさんの命が救われ、対立で生じる痛みも少なくて済みます。ですから、それぞれの関係に十分に注意し、憎しみが蓄積して爆発しないようにしなければなりません。

2. どの命も尊い

対立を武力で解決する場合には、誰にも生きる権利が平等にあることを常に忘れてはなりません。対立で失われる命が少ないほど良い解決策と言えます。他人の亡骸の上に平和を築くことなど不可能です。

3. 武器よさらば

人に武器を向けるのはよほどのことであるということを忘れてはなりません。世界中で武装が解除されれば民主主義が発展します。戦争よりも民主主義の方が努力を必要としますが、数百万人の命を救うのは民主主義です。国連のような組織が先頭に立って世界平和を実現すべきです。

4. 朝にその日が分かるように、子どもを見れば大人が分かる

少数民族や少数派宗教を受け入れる寛容さは、親が子どもを育てる中で何かにつけて教えていくものです。全ては家族から始まります。ですから、世界中の親は、子どもの道徳観は親の責任であることを理解しなければなりません。一般的に家族のような集団や外からの影響を受けることはありません。つまり、自分の子どもをどのように育てるかは、親次第なのです。

5. 教えられないのなら生まれない方がまし

子どもの性格を形成するもう 1 つのもの。それは教育です。地球に平和を広げたいと願う人間を育てたいのならば教育に力を注ぐべきです。学校が人種や宗教によって子どもを差別することがあってはなりません。宗教教育は選択とし、どの宗教を学ぶかは本人に選択させるべきです。

6. 権力は公正であるべき

世界各国政府が、その国に住んでいる民族を差別したり覇権したりすることがあってはなりません。人間愛の実現には誰に対しても公平な態度が不可欠です。

7. 力を合わせれば強い

人は、多彩な多文化社会はその国に大きな利益をもたらすことを理解しなければなりません。問題は視点を変わると簡単に解決できるのが常だからです。民族や宗教の対立を防ぐには、多元性の推進が最善策です。多元性優位の社会は、国内外に適切な法規範を整備することによって実現することができます。

私のプロジェクトは「思いやりで怒りを鎮めよう」です。私は、地球に平和をもたらすものは思いやり以外にないと考えています。ダライ・ラマはかつて次のように言われました。「思いやりは宗教の問題ではない。人間の問題なのだ。思いやりは贅沢ではない。私たち自身の平和と心の安定に欠かせないもの、人間が存続していくために不可欠なものである」。

私たちの心に充満している怒りを鎮め、平和の母である思いやりに転化しようではありませんか！

質問しよう、人間でいよう

(原文は英語)

リナ・アル・エジェイラト (23 歳)

ヨルダン・アンマン市

私はヨルダン人です。私はアラブ人です。私はアラブ人で、ヨルダン人で、キリスト教徒です。難民ではありません。移民でもありません。両親は、異文化で結婚したわけではありません。この国で10代前まで家系をさかのぼることができます。

一部の人のために、この国で私は宗教的少数派です。宗教はキリスト教ですが、集団文化はイスラム教徒です。

集団文化とは一体何を意味するのでしょうか？

支配的文化、この場合には支配的宗教の伝統や価値観から来る様々な善悪、価値観、総意を意味すると考えます。

私は、人と違っていることが難しい社会、「個人」よりも「集団」が優先される社会、人と違ったことをすると、規範を壊すのではなく、規範にぶつかって自分が壊れてしまう社会に私は住んでいます。

私は、移民労働者が劣等人種として扱われる社会に暮らしています。多くの家庭では、5歳の子どもがスリランカやフィリピン、インドネシア出身の家事労働者を、家族の所有物であるかのように扱っています。こうした女性はどこへ行っても「メイド」というレッテルを貼られ、その国で暮らしている人間が受けてしかるべき社会生活、自由、人種差別の撤廃をコミュニティ全体で受けられません。

若者は、インターネットや衛星放送、映画など、様々なメディアを通じて様々な文化に触れていると考えています。ところが、別の文化について知らせるのではなく、ごく表面しか見せていないの

が、実は、このメディアなのです。ドイツの友人をダウントウンに連れて行った時のことです。彼女は、髪はブロンドで肌は白く、アンマンの女の子とはちょっと違った服装をしている、いわゆる

(「典型的」というようなものがあるとすれば)「典型的な」ヨーロッパ人という見た目でした。道路を歩いていると、10代の男の子が窓から英語で叫びました。「おい、ネエちゃん。よおよお、ネエちゃん」。

私は恥ずかしくなりましたが、友人は冷静に受け止めてそのまま歩き続け、「あんな言葉を浴びせかけるのは大体が10代の男の子」と説明してくれました。つまり、こうした少年は、タブーとは何かを早くから明確にする大変保守的な社会に暮らしていますが、後になってメディアやテレビ、映画を

見て、タブーが禁止も、非難もされない別の社会のイメージを得ます。彼等の心には、別の文化や考え方によるこうした別の取り組み方を「罪」と考えるような独善的な刷り込みやプログラミングが行われていて、ブロンドの女性は全員が「罪深い」外国映画の登場人物と同じなのです。

彼らは、自分たちの狭い活動範囲外の世界が、大がかりなハリウッド映画そっくりのものではないことを知らないのです。「フレンズ」や「セックス・アンド・ザ・シティ」を見ることが、心を開いて「他者」をより学ぶグローバルイゼーション 101 ではないことを知らないのです。

では、私たちはどうしたら良いのでしょうか？どのように若者を教育し、多様性を受け入れて多文化社会で平和に暮らせるようにしたらよいのでしょうか？

私は、自分とは違う人を「自分の価値観が脅かされる」あるいは「自分の文化が台無しにされる」と感じないで受け入れるという、多様性に関する最も貴重な教訓をインターナショナルユースキャンプでの体験を通じて学びました。ただし、すべてのユースキャンプが同じとは限りません。「異国の」人との交流に全員の気持が昂っている大きなお祭のような雰囲気の中で、食べ物や音楽、冊子、みやげ物を持ち寄り、交換するキャンプのことを言っているわけではありません。

そうではなく、一緒に座って、恥かしがらずに質問をするキャンプです。「知らない」ということが分かったら質問をします。質問をするのは、判断したり意見をまとめたりするためではなく、理解し分かるようにするためです。対話は簡単ではありません。「いつもどんな昼食を食べますか？」

「町でショートパンツをはいても良いのですか？」といった軽い会話ではありません。誰かに対して何かを立証しようとするもの、あるいはお国の観光省の広報担当官の役割を果たそうというものでもありません。対話とは、自分が当然と思っていること、自分に引き継がれ、自分が何の疑問もなく受け入れたものを全てさらけ出し、表面から奥へと深く掘り下げることを了解した時に成立するものです。

若者が、勝ち負けには関係のない、むしろ迷路を進むような、選手が様々なスタート地点から出発し、道は交差している不確かな運動場に進む勇気と冒険心を学んだとき、自分たちの運んでいたすべての荷物の下に単純な「人間性」という真実があることを発見します。そこまで行けば、若者の心は、それまで体験したことのない自由を体験することになります。

私たちの社会、私たちの教育制度は、今でも答え中心が主流ですが、もっと質問を中心にすべきであると考えます。「正解は1つだけ」「その正解は与えられた教科書の中にあるもの」と子どもの心に教え込むことは、心の狭い、独善的な人間になるようにプログラミングしていることです。若者を一堂に集め、質問するよう呼びかけ、何でも質問し、めったに入り込まない場所で答えを探してみようではありませんか。行政や機関は、体験学習、旅行経験、そしてここが最も重要なのですが、メディアの意図や画一性のパラダイムに捉われずに、直接見聞する機会を若者に与えるための予算を増やすべきだと思います。

これは挑戦ですし、リスクを伴います。大きな混乱を来すかもしれません。

私は、今でも自分をヨルダン人で、アラブ人で、キリスト教徒だと思っています。

しかし、それにも増して私は人間です。人間であることが私のパスポートであり、私の市民権、私

の宗教なのです。

寛容であることを学ぶ大きな村

(原文はフランス語)

アンドリアマエファ・ニリソア・マララティアナ (21 歳)

マダガスカル・タナナリブ市

タナナリブ大学

国境という壁が取り除かれてこのかた、海の向うからいろいろな人たちが私たちの国にやって来るのを目にするようになった。私たちが「外人」と呼んでいるこれらの人たちは、私たちと同じ道を歩き、同じ学校に通い、同じレストランで食事をする。もう私たちの日常からは切り離せない一部だ。しかし、彼らに対して、私たちは軽蔑の思いしか抱かない。これらの事実をよく考えてみると、私たちが彼らのことを脅威として受け止めていることに気付く。あいつらがやって来たのは若い娘や仕事を奪い取るためだとか、詐欺を働いたり大事な資源を盗んだりするためだとか私たちがささやき合うのはそのせいだ。これまで一度として相手を理解しようという努力はなされていない。私たちの通う大学を例に挙げると、5 年にわたる教育課程のあいだ毎日のように顔を合わせる外人学生と友だちになろうという努力をする人間は一人もいない。毎日顔を合わせていながら、隣に座ったり同じ勉強グループに属したりしないようにいつも口実を探している。あいつは臭いからとか、頭が悪いからとか、怖いからとか、相手をバカにしたようなありとあらゆる口実がまかり通っている。そして、外人学生が発言するときはからかい、そばを通れば陰口をきく。一番嘆かわしいのは、こうした愚行を率先しているのが私たち若者たちであるということだ。これをただ愚かしいと言うだけでは、世の中の発展とともに既に過去のものになっていていいようなこういうメンタリティーを説明するには不十分だ。実際、海外旅行のチャンスなど山ほどあるこの時代に、海外で「外人」扱いされるのを願う人間などいるはずがない。だからこそ、こういうことはもう止めにしなければいけない。ところが、現状を変革しようとするとき、その要になるのが、この同じ若者たちなのだ。あらゆる変革の努力は若者たちをターゲットにすべきだと私が考えるのはまさにそこにある。

若者たちが言葉を交わす機会を作るのには、ゲームほど有効な手段はない。ゲームは、いろんな国の人たちを一つにまとめるための最高の手段だ。例えば「スポーツは、人生の学校だ」とよく言われるように、スポーツは、チームワークの大切さを人に理解させるための唯一の方法だ。スポーツは、チームワークの精神が効果を発揮しメンバーの一人ひとりが自分を有用だと感じられるような特別な場所である。そして、それはどこの国に行っても変わらない。スポーツにおいては、また次の試合があると分かっているので人は負けるのを受け入れることを学ぶ。また、勝ったときはそれを謙虚に受

け止めることを学ぶ。そして、スポーツは、誰にとってもルール違反はルール違反なのだから、同じ言語を話さなくとも互いに理解し合えるような特別な場所でもある。

以上の理由から、私は、いろんな国の人たちの間に対話の機会を創り出す上でゲームが唯一有効な手段であると考え。私が提案するのは、「世界村（グローバル・ヴィレッジ）」と呼ばれているような組織だ。夏休みの間に立ち上げることができるだろう。これまでは国際的な規模で組織されることが多かったが、ここでは国内だけを対象とし、国内の津々浦々から様々な国籍の若者たちを招待して世界村に参加してもらう。一週間にわたって、これらの若者たちは生活をともにし、食事を分かち合い、同じゲームに参加する。毎日のように道ですれ違っているのに、お互い友だちになれるとは想像したこともなかったようなこういう若者たちに、言葉を交わす場を用意するというのが意図だ。その一週間のあいだには、いろいろな催しが用意されることだろう。全体集会では、隣り合って暮らす国民の間にコミュニケーションが不足するとどんな悪い結果をもたらされるのかを若者たちに説明する。若者たちが国籍別にまとまって自分たちの国や文化を紹介する目的で、ブースが並んだ展示会のようなものも企画されるだろう。相手のことをよく知れば知るほど、話しかけるのも容易になるはずだ。若者たちが分かち合い語り合う機会を増やすために、週の残りは様々な国籍が交じり合ったグループで生活することになるだろう。これらのグループは、一緒に食事し一緒に勉強し一緒にゲームを楽しむ。以下のようなテーマを扱うための勉強会も組織されるだろう：隣り合って暮らす国民の間に争いが絶えないのはなぜか。平和に共存していくためには何が必要か。争いのない世界を創り出すために若者にはどんな提案ができるのか。どうやって地球村というコンセプトを広げていくか（インターネットのチャットルーム、若者たちの連絡網など）。地球村の精神を絶やさないようにするにはどのような活動を続けていくべきか。スポーツのトーナメントや映画の上映会など、グループの枠を超えたイベントも計画されるだろう。そして、それぞれのグループは週末に「寛容さのトロフィー」を勝ち取るために毎日異なるグループと対戦する。一週間が終わったところで、若者たちからの提案が読み上げられ、様々な誓約がなされることだろう。提案の中では、周囲の無理解の中でも若者たちがこの先も自由に行き来できるような場所として「寛容であることを学ぶセンター」を設立するというアイデアが持ち出されることだろう。グループや団体を結成し、若者のネットワークをたち上げることも必要になるだろう。これらの若者たちが、「センター」であれチャットルームであれ、この先も出会いの機会を大切にしていれば、別の若者たちも次第にその輪に加わり出し、いつしか「外人」という言葉は使われなくなっていることだろう。

ある日のこと、私たちの通う大学で、教授の一人が「君たちの夢は何だ」と尋ねたとき、学生たちが答えを出すのに時間は掛からなかった。金持ちになること、出世すること、どこでも耳にするような答えばかりだった。教授はそれを聞くと大きなため息をついて立ち上がり、こう言った。「君たちにはがっかりさせられる。君たちは若いのに、どうして金儲けや出世の夢しか見られないんだ。君たちが世界を変えようという夢を抱いていたのは、今や遠い昔のことだと見える。」しかし、私はこう言いたい。私たち若者は大きな可能性を秘めている。未来を夢見ることができる。ただそれだけではなく、私たちは夢を現実に変えることさえできるのだ。地球村というアイデアが野心的なものであること

は確かだ。しかし、若者はより良い世界を夢見ることが止めない。必要なのは、彼らを信頼し、彼らに夢を実現するための手段を与えてやることだけだ。

共に空まで

(原文は英語)

ジャクリーン・デッカーズ (17 歳)
オランダ・カペラナアンデナイセル市
エマウス・カレッジ

今年、フランスの暴動のニュースを聞いたとき、私はとてもショックを受けました。フランスに住むアラブ系の若者たちが、差別に抗議して暴動を起こしました。

彼らの行動は、もちろん正しいことではありませんが、彼らには自分たちの生活を改善しようにもできない苛立ちや無力さを示す手段が、他に見つけられなかったのだと思います。2006年のヨーロッパで、未だにこのようなことが起こるとは信じがたいことです。自分たちと異なるというだけで、他のグループを憎むようなことになれば、どのような惨事になるか、私たちは歴史から学ばなかったのでしょうか。

ポーランドにも異文化が混在する社会があります。ここでは、さまざまな国から移住してきた人が大勢暮らしています。フランスのようなことがオランダでも起これば、大変なことになるでしょう。ヨーロッパの多くの大人は、このような社会問題への認識が低いように思われます。そのような差別はここには存在せず、他国の問題だという人さえいます。彼らは現実を見たくないのでしょう。

悲惨な状況を避けたいのであれば、私たちは、社会に存在するすべての問題を直視しなければならないと思います。社会の急激な変化は、そのような悲惨な状況を未然に防ぐために起こるように私には思えます。私は、ずっとこのことを考えていました。そして、いいアイデアが浮かびました。私は、若者は大きなパワーを持っていると思います。若者はとても熱意があり、活動的で、目的があれば簡単にはあきらめません。私たち若者には夢があり、世界をよりよくしたいと思っています。

私は、自分の住む地域で多文化フェスティバルを組織しました。地域の人たちは、私の多文化フェスティバル開催のプランを聞いて、とても喜んでくれ、フェスティバルの支援を決めました。地方新聞は、私のプロジェクトの記事を書いてくれました。フェスティバルを、このように宣伝できたのは、とてもよいアイデアでした。いくつかの企業は、フェスティバルの期間中、食べ物や飲み物の無料提供で支援してくれました。私の友人や学校が、このことを知ると、私のことをとても誇りに思ってくれました。そして、もちろん、喜んで協力してくれました。私は、年齢に関りなく、みなが熱心なのに驚かされました。一番大切なことは、様々な文化を持つ若者たちが、このプロジェクトのために、一緒になって懸命に働いたことでした。

みなが同じ目標を持っていました。互いを理解し合いこと、そして、それぞれの異なることも似ていることも、その価値を認め合うことを学ぶというものです。みな一緒に踊り、歌い、食べて、笑いました。500 人もの若者が多文化フェスティバルに参加してくれました。彼らの出身国は様々で、モロッコ、トルコ、スリナム、中国、インドネシア、アフガニスタン、イラン、それにアフリカなどもありました。これほど多様な文化に触れたことや、それぞれの若者が、彼らの文化をどれほど誇りに思っているかを知ること、すばらしいことでした。私たちは、民族衣装のファッションショーを組織しました。様々な民族音楽を演奏するグループもありました。いよいよという時に、私はダンスコンテストの開催をひらめきました。これは大成功でした。来場者もコンテストに参加できるようにしました。参加者全員が、それぞれ3カ国の民族舞踊を踊るのが、このコンテストの特徴でした。自国の踊りは禁止にしました。若者たちがお互いから学びあう姿に感動しました。モロッコから来た若者たちは、オランダの民族舞踊を習っていました。私たちは、世界中の舞踊の中から、サンバ、ギリシャ舞踊、インド舞踊、アフリカンダンスのまったく異なった4つの踊りを選びました。ダンスコンテストへの参加希望者は大勢いました。非常におもしろいコンテストで、みなとても楽しんでくれました。優勝は、動きのとてもよかった中国人の女の子で、賞品として、様々な民族音楽のコレクションを受け取りました。

フェスティバルの終わる頃には、みなが私のプロジェクトに積極的になっていました。来年もまた、多文化フェスティバルを開催する計画を立てるほどでした。大勢のスポンサーが、来年のイベントの経済的支援を申し出てくれました。さらに、来年のイベント運営を手伝ってくれる若者のグループもできました。

より多くの若者が率先して、それぞれの地域でこのようなイベントを開催すれば、異なった文化的背景を持つ若者たちが、もっとよく理解しあえる大きな助けとなるでしょう。

私のプロジェクトは、世界をよりよく変えるには、とても小さな一歩ですが、みなと一緒に小さな一歩を踏み出せば、私たちは空でさえもたどり着けることでしょう。

異文化コミュニティーを作る

(原文は英語)

アリス・ウェルム (21 歳)

ドイツ<オランダ・マーストリヒト市在住>

マーストリヒト大学

異なる文化を持つ人々が共に平和に暮らすには、一つのことを理解することが大切です。私たちはみな似ているということです。私たちは面白いと思ったら笑うし、愛する人が亡くなれば泣きます。これらは人間の基本的な感情で、(ほとんど)すべての人が分かち合い、文化を超えてすぐに理解できるものです。時には、私たちの違いのほうが、似ている点よりも大きいかのように見えることがあります。私たちのプロジェクトで、私と友人が乗り越えたかったのは、この先入観でした。

この2年間、私はここマーストリヒトの特別なコミュニティーに所属しています。マーストリヒトは、古い建物や教会、そして歴史にあふれた雰囲気のある美しい街です。ここに住んだ最初の年には、寂しいと感じました。ここでは、学生はみな個室に住み、同じ家に住んだとしても、他の人とは離れた個別の生活をしています。私は、友人と会って楽しく過ごしても、同居から生まれる親しさを恋しく思っていました。そのため、友人4人が一軒家に一緒に住まないかと聞いてくれたときには、そのチャンスに飛びつき、「ええ、もちろん!」と即答しました。

私たちは、この家が独特なものになるだろうと最初からわかっていました。まず第一に、みな出身国が違いました。一人の男性は、イランとフィンランドの家系を持ち、もう一人のカナダ人男性は、2年間香港に住んでいました。他には、ドイツ人が2人いて、私はイギリス人とドイツ人の家系出身で、以前はベルギーに住んでいました。私たちは、一つの点についても、いろいろな文化の違いに接しました。私たちは、様々なアイディアや世界観、思想をそれぞれ持っていました。それでも、みなが共通して持っていたことは、違いはあっても、私たちは共に平和に暮らすことができるという信念でした。どのような人物であっても認められ、どのようなことをコミュニティーに持ち込もうと愛されているということを確認し合いました。私たちは、愛と信頼の雰囲気を保ち続けました。そのため、私たちの家は大きくなっていきました。今では、ネパール人男性と、ニュージーランド人女性、それにアメリカ人男性が私たちと共に生活をしています。来客も頻繁にリビングで長居をしていきます。私たちは互いに興味を持って、一緒に料理をし、また、私たちに大切なことは何かを話し合います。最近のネパールでの問題では、私たちもニュースを気につけ、私たちが彼のために側にいると知ってもらえるよう心がけました。家では、一緒に料理をし、重要なことや感じている事を話し合っ

います。最後の部分は特に重要で、家の中のオープンな雰囲気をかもし出す大きな要因となっています。

もちろん、対立することもあります。様々な文化が共にあるためには、避けられない意見の対立もあります。このような場合、常に大切なことは“激昂”せずに、冷静に話し合い、相手の意見を尊重することです。他の人の意見に同意する必要はなく、また、意見の相違があっても、その人の人格についての認識を変える必要はないということを、私は学びました。今では、私と異なった視点を持っている人でも受け入れやすくなり、たとえばイスラム教女性のヘッドスカーフや死刑についての意見が異なったとしても、その人のことが好きで尊敬していることに変わりはありません。

他の人のあるがままを好きになり、同意できない意見であっても耳を傾け、認めることは、私にとって困難なことの一つです。それもで、私は学んでいます。

この家を始めてから、ずいぶん経ちました。そして、多くの人に出会いました。しばらく滞在した人もいれば、出て行った人もいました。私たちは、人に興味をもち、おもしろい人たちが私たちの所に訪れました。スリナムからの移民の男性が私たちの家に来て、彼の人生を語ったこともありました。精神病施設で過ごしたことのある女性が、一緒に滞在したこともありました。いずれの時も大変ではありましたが、こういう人たちでさえも認められ、私たちの家に受け入れられるのを見て感激しました。私一人では、そんなに強くはなれなかったでしょう。

私たちがコミュニティで共有するアイディアは、さらに広がりました。カナダ人の友人は、持続可能な環境と貧困に焦点をあてた国際的な学生団体を起ち上げました。一年近く続き、30名のメンバーがいます。ハンガリーでのワークショップでは、他の人のありのままを受け入れたり、興味を持つことを知らない人たちの隔たりを、私の「家」の友人たちが自然に埋めていくのを見ました。

私たちの家が特別なのは、その人のバックグラウンドや文化に関わらず、そのまますを受け入れる能力があるからです。心を開き、他人を受け入れることが、この2年間、この家をまとめてきた不可欠な要素です。このためには、どんな意見も笑われたりせず、真剣にとらえられることが重要です。

他の人への愛と尊敬、オープンなコミュニケーション、そして、属している文化に関係なく、人として受け入れられる場所にいると自覚していることが、うまく作用するのです。私の家が例外だとは思いません。どこでも築けることです。実際、マーストリヒトには、まったく同じような環境で、癌に苦しむ人々の支援に成功している施設があります。

コミュニティに共通の興味があろうと無かろうと、その本質に他人を受け入れる思いがある限り、異文化が共生し、学び合うことは可能です。私が保証します。いずれにせよ、それが、この2年間に私が何度も見てきたことなのです。